

国立国語研究所学術情報リポジトリ

「日本語研究文献目録・雑誌編」にみる国語研究の 動向

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): General Bibliography of Japanese Linguistic Studies, trends in Japanese Linguistics, Kokugo Nenkan 作成者: 山崎, 誠, YAMAZAKI, Makoto メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001333

「日本語研究文献目録・雑誌編」
にみる国語研究の動向

山崎 誠

要旨：『日本語研究文献目録・雑誌編』を資料にして、各研究分野・話題についての文献数の推移、著者数、雑誌数の増減などを通じて、過去30年間の国語研究の動きを統計的に概観した。

キーワード：『日本語研究文献目録・雑誌編』、国語学の動向、『国語年鑑』

Abstract : Using the Periodicals Section of the General Bibliography of Japanese Language Studies (Kokugo Nenkan) of the last thirty years, a statistical study was conducted to trace the changes in the frequency of problems treated and number of authors, as well as that of publications of journals.

Key words : General Bibliography of Japanese Linguistic Studies, trends in Japanese Linguistics, Kokugo Nenkan

0. はじめに

1989年7月にフロッピーディスクの形で刊行された国語学会・国立国語研究所編「日本語研究文献目録・雑誌編」（以下、「目録」と略す）は、国語研究所で編纂している「国語年鑑」の昭和29年版～昭和60年版の「雑誌論文一覧」の部分を合併・編集したものである。

この「目録」は、紙ではなく電子媒体で出版されたということもあって、取り扱い、特に検索の便の良さが期待されているが、「目録」からわかることは、文献の題目・著者・掲載誌など、主として研究の内部には立ち入らないことがらである。

このようなものが出版された背景として私は、以下のような状況を想定している。

ひとつには、国語研究の進展にともなう文献量の増大と研究分野の細分化という事態に対する認識である。例えば、「あと五十年ぐらいのうちには、〔国語学の〕ある専門分野についての文献を一通り読み、理解し、自分のものとするために、学問生活の最初の二、三十年」を費やさなければならないだろうから「読むべき文献を精選するには、データバンクを整備しなければならぬ」というような指摘（文献1）がある。

ふたつには、国語学の持っている資料志向である（注1）。国語学は、もともと資料志向にあったが、近年のデータ蓄積の電子化におよんでその傾向はますます加速度をますますのと思われる。国語史・方言・言語社会学などの研究は研究対象としての文献資料やデータを絶対視する風潮がある。言語事実の報告が解釈・理論と同様に重要視されているからである。これは、近代科学の基本理念であった素朴な実証主義的方法（事実の蓄積から帰納によって一般的原理を導き出し、知識の確実性を増してゆくという方法）が、まだ根強くそして無批判に受け入れられていることを意味する。「目録」の出現は、この路線の延長線上にあって、言語研究事実の蓄積から言語研究の発展を期待しようとするものであろう。

以上の状況には、つぎのような疑問をさしはさむ余地があるだろう。

まず、確かに、国語研究に関する文献の生産量は増えているが、「目録」に採録されている文献のうちの約3分の1は非研究的な文献（随筆、対談、コラムなど）と考えられること（注2）。

次に、文献数や研究者数が増えてくれば、おのずと一種の取捨選択が行われるということである。いわゆるマタイ効果（注3）と称される、権威による序列化（一流の学会誌・機関誌に載ったものを重視すること、素人より専門家、専門家の中でも著名な研究者の研究をより評価することなど）によって、研究者の接する情報にフィルターがかかる。これは、学問が情報量の負担過重となって崩壊しないよう、用いられている慣習的な方策であ

る。この方策は、その是非はともかく、今までも国語学で運用されてきたといえるし、今後も維持されることは確実であろう。

したがって、「読むべき文献を精選する」ために、「データバンクを整備し」なくてはならないという当為性はない。精選するには、正に精選するそののみが必要で、その手段は、評価は別として、すでに備わっているのである。つまり、「目録」が現在以上にそのデータベース的機能を発揮したとしても、研究者は、「ある程度価値の高い情報が失われ、ある程度くずが入りこむ危険を覚悟」で「廃棄率の高い情報濾過装置を使わなければならない」（文献4, p.71）のである。

そして、研究の理論的側面に関していえば、その継承的発展が重要視されるため、離れた過去に同主旨の事をいっている人がいたとしても、それが「埋もれた”ものであれば、学史的な価値（再発見とか）はあろうが、現在の研究の進展に積極的に寄与するとは思えない。

むしろ、国語史・方言・言語調査などのどちらかという事実報告に主体を置く実態把握型の研究の蓄積がこの「目録」の主眼であり、その存在意義は、事実の集積が土台となって研究が進展するという先に述べた素朴な実証主義の象徴というべきものであろう。

本稿では、この「目録」を使って、過去30年間の国語学界および国語研究がどのような動きをたどったかを計量的に把握してみようと思う。

1. 分類

1.1 分類の立て方

「目録」の分類わけは、表1のようになっている。これは、近年の「国語年鑑」の分類にほぼ対応している。ちなみに、「国語年鑑」の分類項目の変遷を付表1に示したが、それで見ると、分類は当初は現在と大きく違っている。大きな変化があったのは、1956年（昭和32年版）で、そこから現在のような分類に近づいている。特に1960年以降は、ほぼ分類は固定していて、1965年に「コミュニケーション」と「日本語の研究と教育」（1974年からは「外国人に対する日本語教育」と改名）、1972年に「ことばと機械」が独立したほかは特に大きな変動はない。

「目録」では、現行と分類が異なる古い方については、「年鑑」の小分類を単位として現行の分類にひきつけて再分類している（付表1参照）。

なお、本稿を書くにあたって、「目録」の分類ミスと思われる所を訂正したところがある（付表2）。

表1 「目録」の分類

分類	略号	分類	略号
国語学一般	(一般)	日本語情報処理	(情報)
国語史	(語史)	コミュニケーション	(コミ)
音声・音韻	(音韻)	マスコミュニケーション	(マス)
文字・表記	(表記)	国語問題	(問題)
語彙	(語彙)	国語教育	(国教)
文法	(文法)	日本語教育	(日教)
待遇表現	(敬語)	言語学	(言語)
文章・文体	(文体)	国語研究資料	(資料)
古典の注釈	(注釈)	書評・紹介	(書評)
方言	(方言)		

1.2 国語年鑑の編集方針

「国語年鑑」の現在の編集担当者(注4)の話によると、大きな流れとして、1950年代後半のころまでは、国語学・国語教育・国語問題という3つの柱で編纂していたが、しだいに国語学中心の編集にかわっていったということである。これは、53年から57年にかけての「年鑑」の分類項目の変遷によく現れている。53年には、「国語学」の分類の中に「音韻・発音、文法、解釈、国語史」が含まれていたが、57年になって、それぞれ独立した分類となっている。また、同時期に「国語問題」の中に表記ばかりでなく「新語、外来語、敬語・ていねい語、共通語と方言」などの分類項目が見受けられることから、「国語問題」の守備範囲が現在より広がったことがわかる。

また、主として、経済的および仕事量の問題から分量をおさえることがあったという。その際には、国語学にとって周辺的な分類から文献数を制限してゆくことが多く、特に国語教育において著しかった。しかし、国語教育関係者の「国語年鑑」に対する要望も無視できないので、あまり数を落とすわけにもいかないということである。

また、編集方針により、文献数の増減が、直ちにその分類に該当する研究領域の盛衰を表しているとは即断できない場合がある。例えば、62年～64年にかけてマス・コミュニケーション関係の文献数が突出しているが、年鑑を見てみると、この時期に限って現在なら採録するとは思えないような純粹のマスコミ論的な文献が多くとられているために文献数が増えていることがわかった。特にこの時期に国語研究においてマスコミの話題に関心が集まったというわけではないようである。

1.3 文献数の推移

表2に、全体(32年間)を4年ごとの8つの期間にわけて文献数の推移を示した。

全体的な傾向として、50年代から80年代の頭までは文献数は増え続けているが、80年代

に入ってから、いくらかの減少を示している。これは、0で述べたような、文献量の増大という認識とは、くい違っているように見える。常識的には、この期間に国語研究は単調増加の傾向をたどったと思われるからである（少なくとも減退したとは考えられていないだろう）。ただし、国語学にとって中核的な領域に対応する分類（表2のA＝国語史、音声・音韻、文字・表記、語彙、文法、待遇表現、文章・文体、方言）とそれ以外の周边的分類（同B）という観点で分けて、77-80期と81-84期とを比べてみると、前者はわずかに増えているのに対して、後者は14%も落ち込んでいることがわかる。国語研究が文献の生産量という点でひとつの高原状態に達したのか、それとも「国語年鑑」の編集方針の影響なのかは、もうすこし時を経て調査してみないとわからないだろう（注5）。

全体の伸びである1.6倍を境にすると、それを上回っている分類は、伸びの大きい順に「日本語教育」「語彙」「言語学」「コミュニケーション」「日本語情報処理」「書評・紹介」「音声・音韻」「国語研究資料」「文法」「国語史」「文章・文体」「国語学一般」である。また、下回っている分類は、低い順に「文字・表記」「古典の注釈」「国語教育」「マスコミュニケーション」「待遇表現」「方言」「国語問題」となっている。

表2 文献数の推移（分類の略号は表1による）

	53-56	57-60	61-64	65-68	69-72	73-76	77-80	81-84	伸び
語史	203	189	193	211	251	275	433	447	2.2
音韻	138	193	235	207	316	393	459	401	2.9
表記	480	79	148	223	271	280	235	333	0.7
語彙	280	475	448	689	822	1,089	1,424	1,327	4.7
文法	284	480	406	488	646	475	512	664	2.3
敬語	79	82	65	115	61	77	54	82	1.0
文体	312	417	352	547	559	411	747	662	2.1
方言	491	448	437	479	515	576	588	631	1.3
A	2,267	2,363	2,284	2,959	3,441	3,576	4,452	4,547	2.0
一般	551	472	617	770	954	987	1,365	1,024	1.9
注釈	313	323	236	193	229	222	208	229	0.7
情報	48	42	25	136	169	106	196	177	3.7
マス	247	228	192	484	534	847	1,283	924	3.7
問題	333	181	478	173	159	185	252	348	1.0
国教	305	648	582	265	377	300	488	403	1.3
日教	3,801	3,175	3,628	2,348	2,254	2,408	3,538	3,184	0.8
言語	24	0	28	100	206	321	357	389	16.2
資料	333	375	480	992	1,226	1,398	1,576	1,323	4.0
書評	63	71	67	143	204	259	314	157	2.5
	174	258	512	380	475	538	518	516	3.0
B	6,192	5,773	6,845	5,984	6,787	7,571	10,055	8,674	1.4
全体	8,459	8,136	9,129	8,943	10,228	11,147	14,507	13,221	1.6

（A…中核的分类，B…周边的分类，伸びは81-84期を53-56期で割った値）

この傾向は、近年の日本語教育・日本語情報処理・社会言語学の隆盛および国語政策の低迷を顕著にあらわしたものとえよう。ただし、言語研究にとって周辺の（学際的）ともいえる分野は、「国語年鑑」の編集主体である国語研究所が文献を把握する能力において、どうしても人文科学系の定期刊行物に限られるため、おのずと限定されよう。例えば「日本語情報処理」などは、理工学系の雑誌から文献を拾っていたらもっと数は増えていたであろう（注6）。

「文字・表記」の伸びが低いのは、53-56 期に「国語問題」的な文献がまぎれこんでいるためかもしれない（注7）。また、「古典の注釈」「国語教育」が減少しているのは、それらの研究が一般的に衰えたというより、「国語年鑑」の採録からしだいにはずされてきたということで、「年鑑」が国語学を中心に編集する傾向を強めたためであろう。

また、前述の中核的分類、周辺的分類という区別では、前者が2倍ののびであるのに対して後者は、1.4 倍と低い。一般に科学の成長における倍時間は、通常20~30年とされている（文献5, p.9）ので、国語学の中核的部分に関しては、その一般論があてはまる（後出のように、異なり著者数、異なり雑誌数もこの時期に約2倍になっている）が、図1にみられるようにその傾向は直線的な増加の傾向であり、自然科学における指数的な（あるいはロジスチックな）増加傾向とは様相を異にするようである。

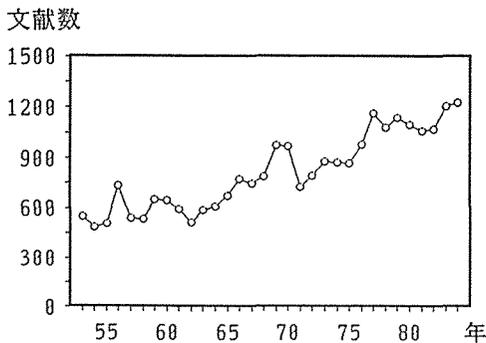


図1 文献数の推移（中核的分類）

個別的にみると、69-72 期に「文法」が突出しているのは、「月刊文法」の刊行時期（68年11月~71年3月）にあっていたためである。

「日本語教育」の57-60 期が0なのは、この時期に日本語教育関係の文献がまったくなかったというわけではなく、この「目録」の再分類の細かさが「年鑑」の小分類のレベルで行われているので、たまたま該当する分類項目がなかったためである。

2. 題目について

この「目録」に記載されているのは、各文献のタイトルである。従ってその限りにおいて文献の内容をうかがいしることができる。

すべての題目に論文のテーマがすべて集約されているとはいいがたいし、象徴的なタイトルを付けて意味をこめる場合もあろう。また、方法論的なことがらは、それが主論点でないかぎり、おもてには出てこないものである。それにもかかわらず、一般的に論文は、比較的短く、個別のテーマを扱ったものであるから、その論文が何について書かれたものであるか(話題)は、題目に現れている可能性が大きいと考えられる。

このことから、ある種の話題に関しては、時代的な推移を追ってみることができよう。

個別の話題については、この期間に特徴的な変化のあったと思われる語をいくつか選んでその推移をみた(図2~4)。

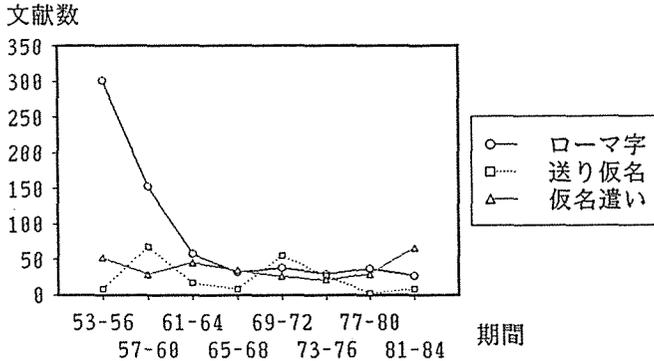


図2 話題の推移 (1)

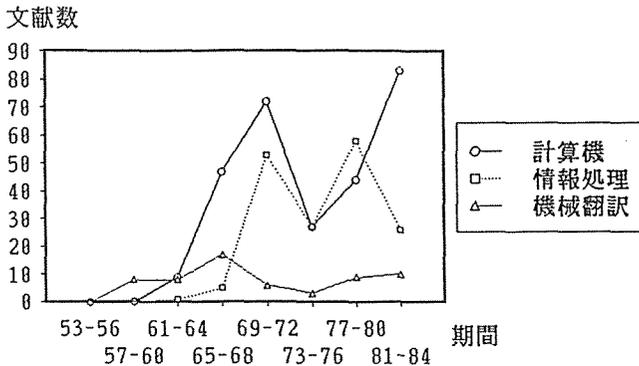


図3 話題の推移 (2)

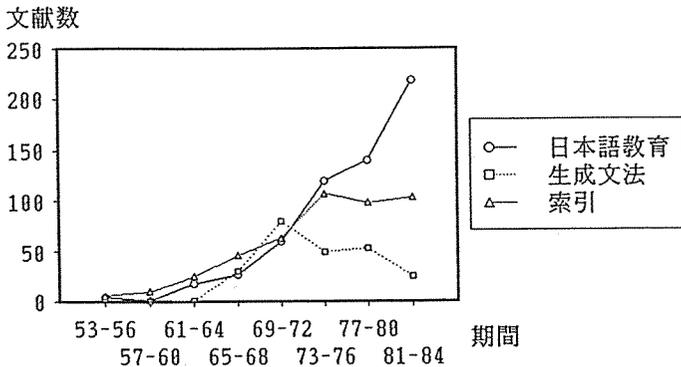


図4 話題の推移 (3)

ここでは、題目中に含まれる文字列の検索をした結果を示した。従って、主題としてそのトピックを扱っていても題目に現れない文献については無視することになる。

話題として、はやらなくなったものとして、「ローマ字、送り仮名、仮名遣い」を取り上げてみた。「ローマ字」は、急激に減少している。「送り仮名」は、途中に少し増えているが、減っている。「仮名遣い」は、80年代に入って増えているようにみうけられる。なお、表記のバリエーション（「仮名遣、仮名づかい、かなづかい」等の違い）は考慮して検索した。

増えてきた話題として、「計算機（コンピュータも含む）、情報処理、機械翻訳（自動翻訳も含む）、日本語教育、生成文法（変形文法、チョムスキーも含む）、索引」を取り上げた。「計算機、情報処理、機械翻訳」が、そろって70年代中期に落ち込んでいるのは偶然ではないであろう。「生成文法」は、60年代後期をピークに減少に転じている。これらは、顕著で、しかも常識でも判断できるものである。近年さかんな「語用論」などのように、23文献しか検索できないものや、「モダリティ」のように1件も検索されないものなどもある。

3. 著者について

3.1 著者数

著書の数（注8）は、ほぼ、表2の文献数の推移と同じ傾向を示している。文献数の伸びは全体で1.6倍であったが、著者数（ことなり）の伸びは1.9倍とやや多くなっている。全体の伸びを境にして上回った分類と下回った分類とに分けると、文献数の場合と比べて「国語学一般」「国語史」が下回った方に加わるだけでそれ以外は同じである。

表7 著者数(ことなり)の推移 (分類の略号は表1による)

	53-56	57-60	61-64	65-68	69-72	73-76	77-80	81-84	伸び
語史	143	123	129	131	181	183	267	263	1.8
音韻	94	133	187	156	230	334	389	323	3.4
表記	255	63	121	149	208	212	178	228	0.9
彙	191	346	344	496	587	736	868	966	5.1
文法	178	277	256	294	373	331	354	461	2.6
敬語	63	69	51	93	43	60	40	63	1.0
文体	237	317	308	366	428	356	556	504	2.1
方言	337	288	277	298	323	405	496	382	1.1
A	1,203	1,246	1,300	1,520	1,801	2,165	2,614	2,626	2.2
一般	349	316	524	540	640	564	766	632	1.8
注釈	176	197	159	168	188	208	176	168	1.0
情報	40	33	25	115	128	113	205	190	4.8
コミ	176	204	235	392	488	697	1056	867	4.9
マス	241	156	333	155	132	175	225	259	1.1
問題	214	369	384	171	237	215	296	252	1.2
国教	1,837	1,530	1,733	1,347	1,499	1,326	2,127	1,935	1.1
日教	21	0	24	105	165	237	288	328	15.6
言語	247	308	390	736	917	1,038	1,289	1,078	4.4
資料	20	16	23	78	117	175	207	91	4.6
書評	116	145	337	273	355	404	399	392	3.4
B	2,904	2,760	3,448	3,409	4,018	4,266	5,859	5,185	1.8
全体	3,862	3,581	4,279	4,431	5,226	5,808	7,736	7,105	1.9

(A…中核的分类, B…周边的分类, 伸びは81-84 期を53-56 期で割った値)

3.2 著者からみた分類の関係

研究の進展にともなって、研究領域の細分化・研究者の専門化が進んでくる。研究者の専門とする領域が1つに限られてくると、当然、発表する文献も1つの領域にしばられてくるものと考えられる。そこで、国語研究において、研究の専門化がどの程度おこっているのかを、著者がどの分類とどの分類とにまたがって書いているかという執筆状況によって調べた(注9)。表8は、各著者を単位語、各分類を語彙と考えた時の、各分類間の非対象的類似度(注10)である。例えば、「国語学一般」の「国語史」に対する類似度は23.6であり、「国語史」の「国語学一般」に対する類似度は、53.8となる。

各分類について、横の行を足して平均したものを、その分類の他の分類に対する類似度とし、縦の列を足して平均したものを、その分類に対する他の分類からの類似度として、それぞれの推移を表9, 10に示した。それによると、全体的な傾向としては、他の分類に対する類似度も他の分類からの類似度も漸減である。つまり、それぞれの分類が、孤立化に向かっていると考えられる。

表8 分類の共有度 (分類の略号は表1を参照)

	一般	語史	音韻	表記	語彙	文法	敬語	文体	注釈	方言
一般		23.6	23.7	25.0	46.8	28.3	15.9	36.7	11.9	25.4
語史	53.8		37.7	42.9	66.2	51.9	21.7	45.4	31.9	27.7
音韻	38.8	24.1		23.7	31.4	26.5	8.9	19.1	8.2	23.6
表記	43.9	30.9	27.5		45.9	29.4	15.9	30.2	15.0	14.8
語彙	42.6	28.9	20.9	24.7		33.7	16.8	34.8	18.1	21.9
文法	48.6	33.5	25.9	25.0	56.7		28.0	48.4	28.5	20.0
敬語	50.1	40.7	23.3	25.2	57.7	65.7		48.6	22.0	24.2
文体	42.4	21.7	15.4	19.1	42.1	34.7	14.7		20.4	12.7
注釈	32.1	26.4	10.5	14.8	53.2	31.1	12.7	44.7		6.5
方言	43.0	16.5	28.6	9.8	36.9	23.1	10.8	14.5	4.9	
情報	31.9	9.6	11.4	19.8	21.4	12.1	6.6	10.8	1.7	5.2
コミ	44.9	11.9	14.4	18.4	34.7	18.3	14.4	30.8	4.8	18.6
マス	34.5	7.4	15.1	17.6	30.4	8.2	10.1	22.3	1.7	15.3
問題	40.5	13.4	15.5	35.8	34.2	16.0	11.5	23.9	7.2	13.0
国教	26.3	4.9	6.2	12.6	12.5	9.0	4.7	18.9	4.9	10.7
日教	26.4	5.0	9.7	7.5	20.4	21.5	4.0	12.2	2.0	7.9
言語	29.7	5.7	15.5	9.0	20.7	18.2	3.4	14.9	1.8	8.0
資料	23.4	26.1	12.4	11.9	34.5	18.5	6.7	22.6	24.4	9.5
書評	58.4	30.8	30.0	29.3	49.4	42.7	22.3	42.9	18.2	27.3

表8 (続き)

	情報	コミ	マス	問題	国教	日教	言語	資料	書評
一般	9.3	46.7	22.3	34.4	39.8	12.9	39.4	8.4	39.8
語史	2.2	21.5	5.3	18.4	33.4	6.3	16.6	29.4	46.6
音韻	6.5	16.8	6.7	14.7	24.1	7.5	38.2	7.0	33.5
表記	10.9	28.4	15.3	36.6	38.9	8.5	24.0	10.2	32.6
語彙	7.0	30.6	13.3	20.9	29.7	5.9	20.4	13.2	34.3
文法	3.7	26.1	7.5	20.2	42.1	12.7	27.9	12.6	48.3
敬語	4.0	36.0	12.3	26.5	44.3	11.5	22.6	9.7	51.8
文体	4.9	33.2	12.3	21.0	40.9	8.3	22.8	10.2	37.9
注釈	0.1	13.5	2.1	11.8	35.6	2.5	12.4	19.5	33.7
方言	3.5	34.0	7.4	13.1	30.4	5.3	20.5	10.0	35.4
情報		28.2	14.9	16.6	15.2	5.7	27.8	10.8	23.7
コミ	8.9		27.2	25.0	37.4	11.4	32.4	5.5	34.8
マス	5.4	40.6		24.5	20.6	3.9	17.6	1.9	23.0
問題	14.1	31.6	18.7		43.4	6.6	27.7	3.2	28.1
国教	1.4	26.2	6.9	18.5		3.5	13.7	1.7	31.7
日教	3.7	23.4	4.0	9.7	14.7		27.1	4.5	23.7
言語	5.3	25.6	7.6	11.4	19.8	8.2		2.5	29.2
資料	3.1	11.3	2.1	5.8	18.0	2.9	8.0		21.4
書評	8.1	46.5	17.7	31.9	53.9	15.4	44.1	12.7	

個別的にみると、「国語問題」が他の分類に対する類似度では、それほど下がっていないのに対して、他の分類からの類似度は61-64期以降大きく下がっている。これは、国語問題への関心が多方面から強かったものがうすらいだことの現れとみることができる。

表9・10の通年(53-84)の値を足して2で割った値をその分類の類似度として、その大きい順に並べると、国語学一般(33.4)、書評・紹介(33.1)、語彙(30.9)、文法(27.9)、文章・文体(26.0)、国語史(25.6)、コミュニケーション(25.4)、文字・表記(23.1)、待遇

表現(22.4), 国語教育(22.1), 国語問題(20.7), 音声・音韻(19.5), 言語学(18.9), 方言(17.8), 古典の注釈(16.4), マスコミュニケーション(14.0), 資料(12.1), 言語情報処理(10.5), 日本語教育(10.2)となる。この順序はその分類に該当する研究領域(があるものについては)の専門性の程度というよりも、一般に、国語研究者がテーマとして書きやすい(とっつきやすい)順序を表したものとでもいえよう。

表9 (他の分類に対する)類似度の推移 (分類の略号は表1による)

	53-56	57-60	61-64	65-68	69-72	73-76	77-80	81-84	53-84
一般	15.9	14.4	11.2	11.4	11.0	11.4	11.8	10.9	27.2
語史	12.3	15.3	13.8	13.4	13.6	11.9	11.2	8.3	31.1
音韻	13.5	13.3	13.1	8.3	9.1	4.4	4.9	6.3	19.9
表記	11.0	9.3	11.8	11.4	11.8	11.5	9.7	11.6	25.5
表記	9.7	10.9	12.6	13.5	11.2	8.4	8.2	7.7	23.2
語彙	13.6	12.9	13.0	11.5	14.0	8.7	8.3	7.3	28.6
文法	12.4	14.8	14.0	16.0	16.4	9.8	8.2	10.3	32.0
敬語	8.3	10.2	11.2	9.9	11.0	6.6	7.8	7.5	23.0
文体	9.4	8.0	7.1	6.7	5.8	5.3	5.6	4.7	20.2
注釈	7.3	8.7	10.1	8.0	6.3	5.7	5.7	6.4	19.3
方言	4.6	5.3	5.2	10.3	12.2	4.6	4.4	6.4	15.2
情報	13.9	11.3	14.5	11.6	10.6	8.9	8.2	7.4	21.9
コミ	8.1	7.2	6.4	7.6	9.2	6.7	7.3	7.1	16.7
マス	12.3	9.9	8.0	8.5	7.6	7.7	5.3	8.4	21.4
問題	5.3	4.5	5.0	4.9	4.4	2.8	3.5	3.6	11.9
国教	3.8	---	11.1	4.5	5.2	4.2	4.6	5.8	12.6
日教	7.2	6.5	7.5	4.9	5.0	5.3	4.9	4.2	13.1
言語	14.3	9.3	9.8	3.7	4.3	6.0	5.0	7.2	14.6
資料	13.2	23.0	16.6	16.1	14.0	10.9	11.9	11.1	32.3
書評									
平均	10.3	10.2	10.6	9.6	9.6	7.4	7.1	7.5	21.6

表10 (他の分類からの)類似度の推移 (分類の略号は表1による)

	53-56	57-60	61-64	65-68	69-72	73-76	77-80	81-84	53-84
一般	23.7	18.7	25.9	21.4	19.8	14.5	15.7	14.3	39.5
語史	14.5	9.2	8.0	7.3	8.7	7.0	6.3	4.9	20.1
音韻	5.7	11.3	10.7	5.8	6.3	4.7	5.2	5.6	19.1
表記	13.3	3.8	6.9	8.1	8.9	6.5	4.8	6.0	20.7
表記	11.1	19.2	20.0	20.2	19.9	18.3	17.1	18.5	38.6
語彙	12.4	17.6	14.9	14.1	16.6	11.1	7.6	8.9	27.2
文法	4.3	6.4	2.7	6.5	2.1	1.6	1.1	2.1	12.7
敬語	11.3	15.8	16.2	13.6	14.1	6.4	9.8	8.3	29.0
文体	6.8	10.0	4.6	3.4	4.3	3.5	2.8	2.0	12.6
注釈	11.5	8.9	8.3	6.8	5.1	4.2	4.0	5.8	16.2
方言	1.0	1.2	0.7	3.1	4.1	1.3	1.6	3.2	5.7
情報	9.0	8.5	9.8	12.3	13.3	13.3	14.0	12.2	28.9
コミ	8.2	6.1	8.6	4.7	3.7	2.6	3.0	3.0	11.3
マス	13.3	16.6	11.1	5.3	6.4	5.3	4.5	6.3	20.0
問題	27.4	16.3	16.7	16.6	16.8	10.5	9.5	12.6	32.3
国教	0.4	---	0.9	2.0	2.5	2.4	2.6	4.1	7.7
日教	10.8	9.2	12.2	10.5	10.1	10.9	11.2	9.6	24.6
言語	1.6	0.9	1.0	1.5	2.0	4.0	3.2	2.4	9.6
資料	9.7	14.8	22.6	18.7	18.1	12.6	11.5	12.3	33.9
書評									
平均	10.3	10.2	10.6	9.6	9.6	7.4	7.1	7.5	21.6

3.2 共著の割合

表11に見られるように単独著作の割合は、わずかながら減っている。これは、自然科学系の傾向とくらべると随分緩慢なものがある（注11）。減っているといってもこれは、全体を対象としているので、対談・座談会・シンポジウム記録など非研究的文献が混じっている。雑誌を国語学に関係の深い4学会誌（「国語学」「言語研究」「訓点語と訓点資料」「計量国語学」）に限ると、表12に見られるように単独著作の割合は殆ど減っていないことがわかる。これは、国語研究を含めて人文科学一般に、研究者の組織化が成立しておらず、工学や自然科学などのように制度化された巨大科学にはなっていないことのあらわれだろう（注12）。

表11 1文献あたりの著者数の割合（全体）－数字は%

	53-56	57-60	61-64	65-68	69-72	73-76	77-80	81-84
1人	96.8	95.3	95.0	93.6	93.7	92.7	92.5	91.7
2人	1.2	2.6	2.4	2.8	2.8	4.1	3.7	3.3
3人	0.7	1.2	0.9	1.2	1.1	1.1	1.3	2.5
4人	0.9	0.4	0.8	1.0	1.0	0.8	1.1	1.1
5人以上	0.4	0.6	1.0	1.5	1.4	1.3	1.4	1.4

表12 1文献あたりの著者数の割合（国語学関係学会誌）－数字は%

	53-56	57-60	61-64	65-68	69-72	73-76	77-80	81-84
1人	98.1	98.9	98.2	96.5	93.7	94.9	95.4	95.7
2人	1.1	1.1	1.9	3.2	2.7	2.0	2.6	3.1
3人	-	-	-	-	1.0	0.6	1.0	0.6
4人	0.4	-	-	-	2.2	0.3	0.8	0.3
5人以上	0.4	-	-	0.3	0.5	2.3	0.3	0.3

3.3 著者の属性

著者の属性として、女性および外国人をとりあげる。いずれも機械的に判断しているため、数値はあくまでも参考程度のものである（注13）。女性の著者の割合は、のべ、異なりともに増えている。53-56期と81-84期とを比較した場合、のび率は、のべで5倍、異なりで4.3倍となっている。これは、全体が、のべで1.7倍、異なりで1.9倍の伸びであるのに対してきわだっている（表14）。また、外国人の著者も延べで6.8倍、異なりで8倍と増えている（表15）。

しかし、単独著作率（単独著作をしたのべ著者数を、共著も含むのべ著者数で割った数値）でみると、女性は非女性（主に男性であるが、外国人なども含まれる）に比べて常に少ない値となっている（表16）。さらに、執筆者の位置における女性の割合をみると、第1著者では約8%であるのに対して、第2著者以下では約14%前後と高くなっている（表

17)。つまり、女性は非女性に比べて単独著作をする割合が少ないことがわかる。これは日本の研究者社会の中での女性の置かれた立場を反映しているものであろう。この問題に関しては、科学社会学的な、よりつっこんだ考察が必要であるが、私の能力を超えることであり、言及することはできない。なお、本稿は、現象の記述を主眼としており、現状に対する是非を論じているものではない。

表14 女性著者数の推移

	53-56	57-60	61-64	65-68	69-72	73-76	77-80	81-84	伸び
のべ	373	476	596	717	931	1,203	1,851	1,898	5.1
異なり	269	291	409	463	585	797	1,200	1,144	4.3

(伸びは81-84 期を53-56 期で割った値)

表15 外国人著者数の推移

	53-56	57-60	61-64	65-68	69-72	73-76	77-80	81-84	伸び
のべ	114	99	127	200	331	688	765	780	6.8
異なり	63	61	102	159	263	441	467	504	8

(伸びは81-84 期を53-56 期で割った値)

表16 単独著作率—数字は%

	53-56	57-60	61-64	65-68	69-72	73-76	77-80	81-84
女性	81.5	78.8	80.0	78.7	73.2	70.4	67.1	69.7
非女性	98.8	93.3	88.8	84.2	84.2	83.9	82.3	79.9

表17 執筆者の位置における女性著者の数とその割合（括弧内は%）

	第1著者	第2著者以降
女性	6,336 (7.9)	1,760(14.1)
非女性	74,367(92.2)	10,732(85.9)

また、一方では、女性に集団著作の傾向があることがわかる（表18）。全体に占める女性の割合は約8.7%であるから、2名の共著（全2492組）の場合、確率的にいうと、全ペアのうちの19組（約0.76%）が女性同士の組み合わせであるはずだが、実際には124組（約5%）となっている。さらに、3名の共著の場合は、女性だけあるいは女性を2名含む場合が、推定値より実際の文献の出現率が高くなっている。女性を1名だけ含む文献は、女性が第2、第3著者の場合は推定値とさほど変わらないが、女性が第1著者の場合は、推定値よりかなり少ない値になっている。

この女性の集団著作の傾向が、先程の単独著作率を下けている一つの原因になっているともいえよう。但し、女性が第1著者になっている場合は、集団著作の傾向がなくなるようである。例えば、女性を執筆者の中を含む文献と、女性を第1著者とする文献とを比較

すると、前者は単名の著作が文献数の80%であるのに対して、後者は90%と大きな開きがあり(表19)、全体における単名の著作の割合である94%に近づいている。対象を上述の国語学関係4学会誌にかぎっても、この10%の差は変わらない(それぞれ、85.1%と96.3%)。つまり、単独著作あるいは、第1著者になる人と、第2、第3著者になる人との間に溝があるのである(注14)。

表18 共著の場合の著者の性別順序とその文献数
(2名の場合)

順 序	文献数	推定値
非女 非女	1,924	2,078
非女 女	260	197
女 非女	184	197
女 女	124	19

(3名の場合)

順 序	文献数	推定値	順 序	文献数	推定値
非女 非女 非女	808	828.0	女 非女 非女	48	78.6
非女 非女 女	67	78.6	女 非女 女	19	7.5
非女 女 非女	74	78.6	女 女 非女	20	7.5
非女 女 女	31	7.5	女 女 女	20	0.7

表19 共著の人数による文献数とその割合 ()内の数字は%

	著者に女性を含む文献	女性が第1著者の文献	全 体
1人	5,721 (80.4)	5,721 (90.3)	78,466 (93.7)
2人	536 (7.5)	308 (4.9)	2,492 (3.0)
3人	276 (3.9)	107 (1.7)	1,087 (1.3)
4人	209 (2.9)	83 (1.3)	757 (0.9)
5人以上	374 (5.3)	117 (1.9)	968 (1.2)

表20 異なり著者数

	異なり	女 性	比率
一般	3,071	274	8.9
語史	901	110	12.2
音声	1,302	94	7.2
表記	1,103	112	10.2
語彙	3,244	508	15.7
文法	1,519	233	15.3
敬語	358	64	17.9
文体	2,148	382	17.8
注釈	930	117	12.6
方言	1,937	487	25.1

情報	676	28	4.1
コミ	3,184	399	12.5
マス	1,281	84	6.6
問題	1,499	45	3.0
国教	8,805	1,177	13.4
日教	906	198	21.9
言語	4,189	407	9.7
資料	551	82	14.9
書評	1,594	108	6.8
全体	25,701	3,939	15.3

分類別でみると「方言」「日本語教育」「待遇表現」「文章・文体」「語彙」での異なり著者数に占める女性の割合が、全体での15.3%を上回っている。のべ著者数の各分類で

の割合でも、女性がほぼ同様の分類を占める割合が非女性での割合を上回っている。

表21 のべ著者数 ()内は全体に対する%

	非女性	女性			
一般	6,704(7.9)	471 (5.9)	情報	1,143(1.4)	41 (0.5)
語史	2,117(2.5)	165 (2.1)	コミ	5,107(6.0)	533 (6.6)
音声	2,740(3.2)	180 (2.2)	マス	2,410(2.9)	142 (1.8)
表記	1,893(2.2)	140 (1.7)	問題	3,218(3.8)	58 (0.7)
語彙	6,263(7.4)	723 (9.0)	国教	25,745(30.4)	2,206 (27.4)
文法	3,691(4.4)	351 (4.4)	日教	1,201(1.4)	429 (5.3)
敬語	541(0.6)	86 (1.1)	言語	7,991(9.4)	778 (9.7)
文体	3,690(4.4)	504 (6.3)	資料	795(0.9)	140 (1.7)
注釈	2,088(2.5)	205 (2.6)	書評	3,174(3.8)	173 (2.2)
方言	4,191(5.0)	720 (9.0)	全体	84,702	8,045

4. 雑誌について

4.1 全体的傾向

ここでいう雑誌数とは、各分類において、文献が掲載された雑誌の異なりの数のことであり、その分類に対応する専門誌の数では無い。雑誌数の推移は、文献数の推移とほぼ同じ傾向にある。

表22 雑誌数の推移 (分類の略号は表1による)

	53-56	57-60	61-64	65-68	69-72	73-76	77-80	81-84	伸び
語史	76	62	72	88	123	155	197	209	3.8
音韻	40	60	81	84	125	153	176	141	3.5
表記	77	45	68	115	128	123	136	160	2.1
語彙	83	139	162	250	336	375	405	386	4.7
文法	75	126	124	173	186	224	218	252	3.4
敬語	44	33	32	39	32	54	43	47	1.1
文体	90	105	125	177	182	174	233	238	2.6
方言	77	105	114	130	164	168	200	222	2.9
A	275	342	388	576	693	779	829	807	2.9
一般	118	108	179	156	151	159	179	141	1.2
注釈	69	71	56	57	90	92	103	97	1.4
情報	19	18	13	49	45	27	38	41	2.2
コミ	51	47	51	91	122	205	282	204	4.0
マス	54	45	46	34	21	23	39	32	0.6
問題	75	108	98	71	68	64	83	71	0.9
国教	188	161	217	212	195	259	285	259	1.4
日教	12	0	14	49	48	48	72	77	6.4
言語	114	126	161	297	371	345	359	279	2.4
資料	12	19	16	57	89	95	114	72	6.0
書評	59	48	76	75	84	108	121	90	1.5
B	381	406	537	672	804	867	959	753	2.0
全体	480	559	694	960	1,134	1,263	1,330	1,121	2.3

(A…中核的分类, B…周边的分类, 伸びは81-84 期を53-56 期で割った値)

全体の伸びである2.3倍を上回っているのは、伸びの大きい順に「日本語教育」「国語研究資料」「語彙」「コミュニケーション」「国語史」「音声・音韻」「文法」「方言」「文章・文体」「言語学」である。また、下回っているのは、伸びの低い順に「マスメディア」「国語問題」「待遇表現」「国語学一般」「国語教育」「古典の注釈」「書評・紹介」「文字・表記」「日本語情報処理」である。

「日本語情報処理」が、文献数、著者数で全体の平均をはるかに超える伸びを示しているのに対して、雑誌数では、ほぼ平均程度の伸びである。これは、国立国語研究所の図書館が人文系の雑誌を中心に入手していることからくるものであろう。

4.2 ページ数

図5に見られるようにページ数でみた文献数の推移では、1～5ページの比較的短い文献は、次第に減少している。また、6～10ページの文献はほとんど横ばい、対照的に11ページ以上の文献は、当初の4倍もの伸びになっていることがわかる。短い文献は、往々にしてコラムや随筆であったりするので、年鑑の編集方針の上から採録しない方向に向かっているということの反映でもあろう。また、当然、文献の“質”による選別も行われたかもしれないが、それをこの「目録」からよみとることは難しい。

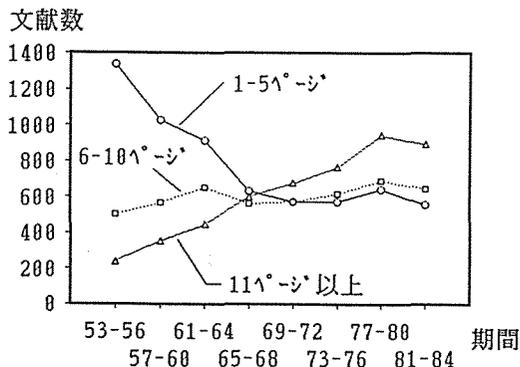


図5 ページ数別の文献数の推移

5. まとめ

「日本語研究文献目録」は、「国語年鑑」を編集したものであるため、その編集に大きく左右されるところがある。しかしながら、大局的にみると、国語学研究的な量的な側面（はやりすたり）を文献数の増減にみることができる。

国語研究においては、従来にはなかったものの出現（コンピュータ）、社会的な変化（日本【語】の国際進出）、政治的な変化（国語問題の低迷）などの影響がみえる。

著者については、個々人よりも研究者集団としての国語研究者社会の特性をみることができる。例えば、女性や外国人著者の割合が急速に増えたが、若干分野による偏りがあること、自然科学に比べて圧倒的に単独著作の割合が高いことなどがわかった。

注

1. 文献2によれば、「国語年鑑」の昭和29年版～昭和60年版の「刊行図書」の調査では、「国語研究資料」「辞典・用語集」の単行本の刊行点数が群を抜いて高く、伸び率も大きいことが指摘されている。
2. 国語学研究文献総索引作成委員会・キーワード委員会のキーワード台紙に記載された、主に著者本人が付けた情報によると、全体の約2割にあたる17,991文献において、実に6,079件の文献が非論文的文献（随筆など）とされている。これは、もっぱら著者本人が付けたという謙遜も少しはあろう。また、調査した分は国語学会員およびキーワード専門委員の分であるから、商業誌などに非研究的文献を書く可能性が高かったともいえようが、「言語生活」誌1誌に掲載された文献（6,124文献）だけで既に全体の7.3%を占めるということからもわかるように専門性が薄いものもある程度混じっていると見えよう。しかし、「目録」では「国語年鑑」で連載等の文献をひとつにまとめていたものをばらしているため、「国語年鑑」自体では非研究的文献の率ももっと下がるだろう。
3. 科学者集団の内部に「貧富の差」を作り出す要因のひとつで、「顕著な評判を獲得している科学者に対しての特定の科学上の承認の増大と、未だ評判を獲得していない科学者からの承認の留保」（文献3，p.141）のこと。聖書の文言にちなんで、社会学者R. K. マートンが名付けたもの。
4. 国立国語研究所・情報資料研究部第2研究室・分室の田原圭子・伊藤菊子両氏の談による。
5. 国語年鑑の編集をしている国立国語研究所・情報資料研究部第2研究室・分室の受け入れ雑誌数（採録誌数ではない）は、右表に示すように順調にのびているようである。（数字は「国立国語研究所年報」による雑誌の異なりの数）

表23 受け入れ雑誌数（異なり）

年	数	年	数	年	数	年	数	年	数
1953	183	1961	308	1969	469	1977	785	1985	852
1954	230	1962	284	1970	540	1978	772	1986	879
1955	251	1963	269	1971	566	1979	765	1987	889
1956	241	1964	238	1972	604	1980	790		
1957	263	1965	429	1973	606	1981	775		
1958	273	1966	415	1974	635	1982	814		
1959	286	1967	447	1975	667	1983	876		
1960	307	1968	475	1976	698	1984	828		

6. 「情報処理学会第37回（昭和63年後期）全国大会講演論文集」（2）には、約100件あまりの自然言語処理関係の文献がある（年鑑未採録）。
7. 53-55年にかけて、「書きことば」という大分類が立てられており、その中に「分かち書き」「たて書き・よこ書き」などの項目がある。
8. 著者が匿名であるものは数えていない。また、同名異人は区別していない。
9. 但し、年鑑の分類を一応信頼するという条件が付く。また、分類に迷うような文献の場合に、往々にして著者の専門と考えられるほうに分類した（前述田原氏談）ということも想定される。
10. 水谷のDと呼ばれている指標（文献6）。AとBとの両方の分類に執筆しているのべ著者数（=N）を、Aの著者数（のべ）で割ったものがAのBに対する類似度である。同様にNをBの著者数（のべ）で割ったものが、BのAに対する類似度となる。表は数値を100倍している。なお対角線はすべて100なので省略した。
11. “Chemical Abstract”誌からとった資料によると、単独著者の割合は、1950年代にすでに50%を割っている（文献5）
12. 「計量国語学」誌はやや自然科学的な傾向がある（下表）。

表24 1文献あたりの著者数の割合（「計量国語学」誌）

	53-56	57-60	61-64	65-68	69-72	73-76	77-80	81-84
1人	-	96.1	94.9	86.3	87.9	85.2	81.9	83.0
2人	-	3.9	5.1	11.8	8.6	9.8	10.8	15.1
3人	-	-	-	-	3.4	3.3	4.8	1.9
4人	-	-	-	-	-	1.6	1.2	-
5人以上	-	-	-	2.0	-	-	1.2	-

13. 名前が「子・代・美・枝・恵・江」で終わっている著者を女性とした。また、外国人は、「目録」の著者の記述方針を参考にして、名前の文字列の中に「,」を含む著者とした（文献7）。したがって、ローマ字表記された日本人著者は、

外国人と数えられ、漢字表記された中国人、韓国人の著者は外国人とはみなされなくなる。

14 非女性の場合は、単独著作率は変わらない(下表)。

表25 共著の人数による文献数とその割合 ()内の数字は%

	著者に非女性を含む文献	非女性が第1著者の文献
1人	72,745 (93.9)	72,745 (93.9)
2人	2,212 (2.9)	2,184 (2.8)
3人	994 (1.3)	980 (1.3)
4人	690 (0.9)	674 (0.9)
5人以上	868 (1.1)	851 (1.1)

文献(洋書の文献の引用は括弧内に示した邦訳による)

1. 野元菊雄(1986)「昭和59・60年における国語学界の展望—総記」『国語学』145集
2. 佐竹秀雄(代表者)(1989)「国語学研究的動向の調査研究」(昭和63年度文部省科学研究費補助金一般研究(A)研究成果報告書)
3. 山崎博敏(1989)「科学の生産性とその階層構造」(成定薫他編「制度としての科学—科学の社会学」, 木鐸社, 1989)
4. B. Barnes(1985) "About Science" (「社会現象としての科学」川出由己訳, 吉岡書店, 1989)
5. D. J. Price(1965) "Little Science, Big Science" (「リトルサイエンス・ビッグサイエンス」, 創元社, 1970)
6. 水谷静夫(1980)「用語類似度による歌謡曲仕訳」, 『計量国語学』12巻4号
7. 古田啓ほか(1989)「文献目録のデータ構造」(「日本語研究文献目録・雑誌編」解説書, 秀英出版, 1989)

分類名	年	53	55	56	58	60	61	63	65	66	68	70	71	73	75	76	78	80	81	83	85	86	
ことは随筆 ことに関する随筆 時評・随筆				○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
国語学史/A				□																			
展望・消息/A 展覧・書評・紹介/A 展覧・書評・紹介/T 外国の国語問題/R 外国の国語問題/R 日本語教授/Q 外国語教育/Q		□□□	□	□	○	○	○	○															
ことは随筆/A				□																			
時評・随筆/A									□	□□□□													
国語史/B 国語史一般 国語史概説 国語史上の諸問題 古代から現代まで 資料研究 辞書 訓点と訓読語 訓点資料【関係】 外国語・洋学資料				□□□□ ○ ○ ○																			
音声・音韻/C 音声・音韻一般 国語音韻論・音声学の概説 実録音声学 「音韻の」史的研究 音韻の変化 アクセント史 アクセント・イントネーション アクセント・イントネーション		□□□□ ○ ○ ○																					

分類名	53・55	56・58・60	61・63・65	66・68・70	71・73・75	76・78・80	81・83・85	86・
現代語類義源		△△○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	△△ △△ △△
新語		○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	△△
新漢語		○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	△△
外来語・隠語【などの研究】		○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	△△
流用語		○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	△△
ことわざ・ほか		○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	△△
句語【の研究】		○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	△△
名前について		○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	△△
名づつけの問題		○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	△△
人名・地名		○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	△△
人名・地名(命名)		○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	△△
人辞書・索引		○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	△△
辞書・索引		○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	△△
辞典研究		○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	△△
索引		○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	△△
地名・人名/E	□□□							
文法/F	□□□□	□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□ ○○
文法一般	□□□□	□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□ ○○
文法上の諸問題	○○○	○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○ ○○○
文法上の諸問題(現代語法)	○○○	○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○ ○○○
現代語法	○○○	○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○ ○○○
【文法の語法	○○○	○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○ ○○○
作品の語法	○○○	○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○ ○○○
文詞	○○○	○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○ ○○○
助動詞	○○○	○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○ ○○○
助詞	○○○	○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○ ○○○
敬語/G	○○○	○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○ ○○○
敬語/G	○○○	○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○ ○○○
敬語・ていねい語/G	□□□	□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□ ○○

分類名	53・55	56・58・60	61・63・65	66・68・70	71・73・75	76・78・80	81・83・85	86・
年								
音訓・送りがなが改定案に関する意見と資料		△△△△△	△△△△△△	△△△△△△	△			
当用漢字など追加	△△△△△	△	△△△△△△	△△△△△△		△△△△△	△	△△
人名漢字								
常用漢字								
漢字教育	△					△		△
かなづかい	△	△	△△△△△△	△			△	△
かな文字の問題	△	△	△△△△△△					
ローマ字の表記法	△	△	△△△△			△△△△△	△△△△△	△△
ローマ字の問題	△	△	△△△△			△		
表記法一般	○△○○○	△△△△	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○
表記法一般	△△△△	△△△△	△△△△△	△				
送り書き	△	△△△△	△△△△△					
よか書き	△	△△△△	△△△△△					
わか書き	△	△△△△	△△△△△	△△				
外来語	△	△	△△△△					
特殊語	○	○						
新語	△	○						
問題としての敬語							○	
敬語・ていねい語								
標準語と方言								
地名・人名の表記 [など]		○	○△△△					
国語教育	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□
国語教育一般	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□
国語教育概説	○	○	○	○	○	○	○	○
国語教育史	○	○	○	○	○	○	○	○

分類名	53・55	56・58・60	61・63・65	66・68・70	71・73・75	76・78・80	81・83・85	86・
年								
問題の紹介			○○					
各国の言語問題の紹介		○○○ △△△△					△	△△
外国における外国語教育		○	○					
外国における外国語教育の研究・問題の紹介		○△△	○△					
外国人の日本語問題			○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○
各国の心理言語研究		○			○○○	○○○○○	○○○○○	○○○
言語習得の研究・資料等						○○○○○	○○○○○	○○○
翻訳/R	□□□	□						
国語研究資料/S								□
国語資料/S	□	□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□
国語資料/S・書誌/S		□□						□□
国語資料/S・書誌/S (録音器)	○○	○	○	△△△	△△△△△	△△△△△	△△△△△	○○
録音器				○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○
耳								
目録								
目録								
書評・紹介/T		□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□
書評/T		□						□□
その他	□□□	□□						
追補	□□□	□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□□□□	□□
補遺				□				

